

『負債論 貨幣と暴力の5000年』 以文社

デヴィッド・グレーバー 著

酒井隆史 監訳 高祖岩三郎・佐々木夏子 訳



「書評」 片岡大右
愛とともに読まれるべき美しい書物

国際的成功を収めた大著が、ついに日本語で、それも実に明快な訳文で読めるようになった。この種の翻訳書にあつては

概念がモラル上の原理として特権化されている。ナイジェリアのティブ族の慣習にしても同様だ。贈り物に対する等価のお返しを決してしないという配慮を通し、彼らは「だれもがだれかに対して、いつもほんの少し負債があるようにすることによって、「…」人間社会を創造」する。しかし債務関係は唯一の根本原理なのか。

して定式化されるこの最後の原理は、本書では遠い過去または未来の理想を指し示すのではなく、あらゆる社会の基盤をなすものとして再提示される。「ほとんどの資本主義企業がその内側ではコミュニケーションに操業していることこそ、資本主義のスキャンダルである」——こうしてアナキスト人類学者は、かつて「民主主義は工場の門前で立ちすくむ」といった言葉で表現された過酷な現実と両立するもうひとつの現実を明らかにするとともに、「すべての社会が矛盾するいくつもの原理の寄せ集めであることを認識した最初の人物」たるモースを踏まえつつ、マルクス主義の理論的前提を相対化する。「ありがとう」その他を口にする言語習慣も、ティブ族の実践も、負債の論理に依拠しつつも実際のところ、「わたしたちの根本的相互依存の承認」として定義される「基盤的コミュニケーション」の経験を証言しているのだ。この美しい書物はそれゆえ、感謝とは別の感情とともに読まれることを求めている。本書自身において示唆されているように、それは愛と呼ばれる感情である。

例外に属する見事な達成に対し、監訳者をはじめとする訳者諸氏に感謝しなければなるまい。ところで「感謝」とは何か。それは相手に対して何らかの心の負担を感じている者が、言葉を射ることによってその緊張を解消することだ。本書の著者は、「please」や「thank you」、「por favor」や「merci」といった欧米諸語の例を取り上げつつ、何気なく交わされるこうした言葉のうち、人間とは何かという根源的な問いを解く手がかりを見出そうとする。これらの言葉は、一方では、相手をモノ扱いしていないこと、「共通の人間であることの承認」の証しだ。しかし他方、著者によれば、そこでは「ただちに帳消しにされるつかのまの債務関係のはてしなき交差」として社会関係が想定されることで、負債

もに発生しつつも、「人間の生を商取引に還元してしまふことがよくないのはそれがよい商取引ではないからだ」とでもいうべき主張に帰着した。今日の社会科学における経済学の特権的地位に反対する試みでさえも、互酬性を前提とする交換の論理に依拠することにより、結局は「遅延された交換」としての負債を「すべてのモラル・ティの根本」に置いてしまふ。しかしグレーバーによれば、等価性へと向かう交換がすべてなのではない。「ヒエラルキー」が、そしてとりわけ「コミュニケーション」が、それと並んで三つの主要なモラルの原理を構成している。「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」と

マルクス主義の理論的前提を相対化する。「ありがとう」その他を口にする言語習慣も、ティブ族の実践も、負債の論理に依拠しつつも実際のところ、「わたしたちの根本的相互依存の承認」として定義される「基盤的コミュニケーション」の経験を証言しているのだ。この美しい書物はそれゆえ、感謝とは別の感情とともに読まれることを求めている。本書自身において示唆されているように、それは愛と呼ばれる感情である。